総合教育センターだより

街路樹

発行第177号
令和５年１１月３０日（木）
いわき市総合教育センター
いわき市平字堂根町１－４
０２４６（２２）３７０５

「社会科の授業改善の視点と実践例紹介」

どの教科においても本時の問い（めあて）をつかませる場面では、子どもに切実な問題（課題）意識をもたせ、追究意欲を高めさせたいものです。社会科では導入場面で具体物や写真、グラフ、年表などを提示し、これまでの知識や生活経験から獲得した「子どもの常識」をゆさぶり、「えっ？」「あれ？」「どうして？」と問題意識を高めさせることがあります。そこで感じた「あれ？」「どうして？」といった違和感やズレが原動力となることで、追究場面では教科書や資料集、インターネットなどを活用して、主体的に学習に取り組む姿が見られるようになります。では、そのような導入場面を、どのように設定していけばよいのでしょうか。

そのカギを握るのが「子どもと資料の出合わせ方」です。授業の導入場面で「〇〇について調べよう」「～について考えよう」と教師から一方的に課題を提示する場面をよく目にしますが、課題が明確ではなく、子どもが何について調べ、考えていくのかはっきりしません。明確に課題をつかませるためには「～のはずなのに、なぜ（どうして）〇〇なのだろう」という問いを設定することが有効です。この問いは「複文型の問い」とも呼ばれ、「社会的事象の意味を考える本時の問いの王道」ともいわれています。複文型にすることで問いが焦点化され、本時の課題が明確化されます。

例えば、次のような問いの設定が考えられます。

3学年･･･こまつなを育てる農家のはずなのに、どうしてトウモロコシの収穫体験を企画するのだろう。
4学年･･･人口は増えたはずなのに、どうしてごみは減ったのだろう。
5学年･･･国内の生産量や工場数が減っているはずなのに、なぜ生産額が変わらないのだろう。
6学年･･･大切な教科書なのに、なぜ墨を塗っているのだろう。

このような問いを設定するためには、教師自身が「違和感やズレ」はどこにあるのかという視点で教材を分析し、教材をクリティカルに見ていくことが大切です。そうした「教材化の視点」が子どもの「追究の視点」へと展開されていきます。

ぜひ「複文型の問い」を意識して教材研究に臨んでみましょう。

参考文献
・澤井陽介監修「『～のはずなのに、なぜ？』を教材化する社会科学習」（東洋館出版社2022）
・吉川幸男・山口社会科実践研究会著「『差異の思考』で変わる社会科の授業」（明治図書2002）

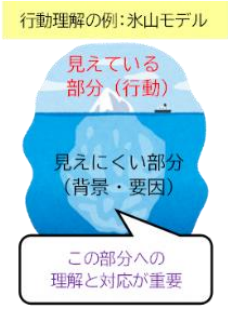
「発達障がい教育」について

文部科学省「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査（2022年）」の調査報告において、学習面又は行動面で著しい困難を示す児童生徒は全国の公立小中学校に通う子どもの8.8%にのぼり、10年前の調査から2.3%増と公表しています。学校現場では特別支援学級にとどまらず、通常の学級においても多様な特性をもった児童生徒へのかかわり方に苦慮している現状がみられます。

本センターでは８月７日（月）に「発達障がい教育講座」が開かれ、福島県特別支援教育センター企画事業部長である橋本 勉先生を講師にお迎えし、176名という多くの先生方の参加のもと研修を行いました。講義では「発達障がいへの理解と校内支援体制の構築について」というテーマのもと、参加された先生方は実際にかかわっている児童生徒をイメージしながら、熱心に受講している様子が見られました。

また、主に子どもたちを理解することや基本的な支援方法についてのお話があり、その中の一つに「氷山モデル」を使った子どもの行動理解についての説明がありました。

【氷山モデルから】
①実態把握（事実を整理）を行う。
②なぜ？どうして？を考える。
③気になる行動の背景・要因を考える。
（環境調整等）



【氷山モデルを受けて】
・見えにくい部分を理解していくことで、子どもへの声かけ等のかかわり方、指導の仕方が変わってくる。
・愛と信頼に基づく教育的関係を築くことが大切。
・環境調整の中で一番大事な環境は教師。「困った子」から「困っている子」へ視点を変えて、寄り添って考えてみる。

このように、すぐに実践してみたいと思われる多くの内容が盛り込まれた研修となりました。まずは目の前の子どもたちを「愛すること。本人を知ろうとすること。」を再認識しながら、全職員でかかわっていきましょう。

「不登校対策講座」より

今年もFR教育臨床研究所所長　花輪　敏男　先生を講師として、８月４日（金）に不登校対策講座（前期）、10月６日（金）に不登校対策講座（後期）を実施しました。

前期には、基礎編として、不登校の子どもたちの心にガソリンを入れてあげることや適切な支援の仕方、不登校児童生徒の行動の捉え方などを理論として学びました。「心にガソリンがない状態で高い目標を設定してもなかなか次につながらない。例えば、泳ぎの苦手な人に『5mでも10mでも泳げるだけ泳いでごらん。無理しないでね』と『（10m離れたところに立たせて）壁まで泳いでごらん』と声をかける。どっちが楽でしょうか」と、分かりやすい例えも入れながらご講義くださいました。私たちは、壁に向かわせない、無理のある（抵抗のある）指導をしていないでしょうか。自分のこれまでの指導を振り返るよい機会となりました。

後期には、応用編として、不登校児童生徒の見取り方について学びました。不登校児童生徒の抱える問題を少しでも解決するためにと、ケーススタディを体験しました。花輪先生が想定した不登校児童生徒を多面的に見取るために、「両親の関わりは？」「ゲーム依存の可能性は？」「外出することはできる？」「学校からのこれまでの関わりは？」「電話や家庭訪問だけではなく、ICTを活用したつながりは？」など、研修者は多くの質問をしていました。また、見えてきた不登校児童生徒像を基に、自分だったら、自校だったらどのような手立てを取ることができるのだろうと熱心に話し合う姿も見られました。

各学校でも、不登校児童生徒を多面的に捉え、適切な支援ができるよう組織を生かした対応を検討していただければと思います。

研修動画の紹介

令和５年度調査研究委員会　国語科と社会科、道徳科の研修動画をアップロードしました！
国語科は「世界にほこる和紙」（小学４年）、社会科は「米づくりのさかんな地域」（小学５年）と「人々の生活と環境」（中学１年）、道徳科は「努力の尊さ」（小学６年）と「自然との共存」（中学３年）です。授業のポイント（視点）を動画で確認できるように編集しました。ぜひ、ご活用ください。資料の保存先や動画の視聴方法については、「街路樹174号」をご参照ください。